国花万宝

日本居家秘用

六

看病

看病人の飯米にて食物の用ひやう菜のまぜやうもしらべて看病人のみたるべきなり

醫撰

医者をまねく附病家の物ちがえあるべい醫を物をもつ射の者多き要く紀

藥

方紙ようりをもつ用ひやうしよ老人小児の長別あり菜せんじやうの仕方丸散の調ようもしらべ菜を用ひるよ梅冬瓜ようの屋後食ようの菜の見菜を用ひる射く多くを花

ヲ8
3370
6

門ヲ8
號 3370
卷 6
昭和十六年四月八日購求

○看病

此部ハ病あり時薬を用ひ
針灸を用ひて治せんを専
病人乃食物用ひやう湯治
乃事までを病のさて病のぞ
ケ病人を助くる心得妻子
ふまつること

○撰醫

人乃病あるを治せざ
源ハ醫乃立ハ ふあり撰ぶべき
ものなり病家乃心得なる
この代に部ふのまく

○看病

▲よろづの事初ふ洋まぎれ
ハ好悔れはしむ病ハ死せ
乃好源をのみてはしむ心
ゑれの事一なり病人ハろ
のんろうしてこしかしば
看病乃人忠誠乃人誠れ
ろ洋して醫師紙探ひまろ
ば看病乃道紙はろうて
あゑとろゑうしば初ふ左ろ

あやまり疾病をおこすこと
バ分して功ふく好世の人
如ふ為り疾病をおこすこと
或ハ父母並ニ孫子らしをも
て悔れ恨ハ有ん事
常ふいつくしあるべ子益の事
ふ心を用ひて醫の道ふを
心を用ひるべしとうるべ子ハ
肩病乃道ふ通ふく醫乃
上手ふと安ふ心をかしハ程ふ
病臥於床之庸醫

此之不孝不善不孝事親者不
可不知困也古人乃格言
たるべし
▲病家乃人醫ふ志あま
ば醫乃上手ふ為ハ病人
を扶源ふ益ふ為ハ或ハ
と我見識を專ふし或ハ
づから業術を放ふこと成好
む所ふ成ハ
らざるハ良醫乃ハ
功成ハ

ゐて只しく殿醫位擬し任ず
じてその効ゆまれゐし
▲肴病乃人ハ病人の顔色
呼吸身体手足宮脹執の
往来脈内乃虚實二使乃
多少清濁汗乃有出すべ
てん紙はらてこそろて醫ふ
と告加しめゐづかしと考
ろゐ殿醫ふのこと任ぬへ
かゝる殿醫ハ一日乃中暫時
うかびゐろこそうなまば

明醫とよびろゐ人と崇ゐる事
あんまこと病人乃肴病成
婦女ふ任ぜゐ殿醫婦女ハ
必抱乃恥とゐ女乃性
ハおろなゐとものなゐ婦
女乃あやゐろよう痛れ和
とゐふいろう或ハ死ふいろ
よわれはし男子ろ人と
づゝ考へ加ろ
▲病すぐふ祭りふ乃びてた
皆虚ふ屬ゐなり邪の

濟り不要紀必虚ゆるゝと
いふ是なり病始て発るハ
急ふ治ずんとすれ世人和
ふ為り是ふいりて治ずんと求
むるのつふ効あり効なれ
ども患ひて数醫ずかの
名手庸工ずんと擇ぶして
業ずんとすれども効なし
業乃攻補ふよりて如何
て病ずんとすれ病家果怪
ずんと思ふ醫ずんと擇ぶ
ざるをはかりて死ずんと俟
たんか

▲醫ずんと人病症ずんと考へ業
方ずんと放ずんとい〳〵ども其法
より服用乃法ふいるとそ
俗ふ病家ふ教ふるを
汁ずんとすれ炙治ずんと
湯ずんとすれ或ハ食治ふ
効ある事ずんと名明らかして放
ずんと病家ふ醫ふ

よく用ひてうの法紙きとろ
だし一点ろ〳〵した殿四者
良法紙放もいへどし病が
治紙此通紙深きた知あ
源だれと功ろうろ
▲人病ある時汁もだれあり
専〳〵灸もだれあり先汁
して灸もだれあり又業
紙もし用ひだれあり或ハ合
治もだれあり業治して好
灸もだれあり或ハ汁灸業

藥放もだれあり又ハ中絶紙深
だれ又ハ中絶紙深
て放もだし一点ろ〳〵ふを世乃
人病あるふ時ちたおほくハ
業紙用ひだれ紙加りて汁
灸あること紙ふする汁もだ
紙ハ加人をあもとし殿四を
うの流をまうちれのくうの
ちれ紙放もこと紙先よ
藥紙ふいろうたた某殿四ハ
汁治ふ害あうと汁醫ハ

業治ハ効ヲ[illegible]ことを[illegible]て
食治と灸治とハ[illegible]に用ゆ
[illegible]人ハ[illegible]あり痛ム時と
益ある事[illegible]ハ通用ス
[illegible]人あるべ[illegible]ひてその理ハ
通ぜざるも効なるものと
或ハ偏僻乃治法とて一極ハ
用ゆべきことの乃理あるを
ゆく求めざるを賊なり各
その理ハ[illegible]ひ[illegible]いづれ
をも偏ありと見るの術

ふくいかゝ[illegible]ぞ本意なれ
食治灸治ハ治法乃中[illegible]補
なるべき業治ハ[illegible]用
ゆ類といて業治針治と
ゝ補ハあるといへども
乃補といふ原を含用灸火
ゝ補ハ用ゆべ[illegible]
一用ゆ[illegible]即ち治ス
或ハ業ゝ業乃補と
いふと参茸乃類ゝ[illegible]
針ゝ厚あて補ありともい[illegible]

ちうとして病家乃人業治を
あやまりて病邪ハ業
ふあらざるを治ずして只
迫世乃人業治ふ派滞して
他乃治法紙拵んで真術跡
みて良法を得ざる故か
一むのを○ひそうふ法乃源
を知らふ病家乃人只醫ハ
病家ふ法紙ちゆ業術紙を
よのをそひ病あるふ拵て
てを遠動紙拵ひ類ふ

業治計治紙或ハ
書ふ書せる湖をを求め
ぞ又病あるふ癒治金治
をを求ひ去るふ醫家
ふを書せ乃術或ハ癒失紙ん
病紙拵ちる強て紙用
知癒ふ法ふ源
紙ちゆ役乃ごくこひ又病家
をを業術を得ざくる
ちの恩紙思乃ちの報礼も
ちぞ源治紙とちゆをちう

源左ふ藤立ぢまとれいれのぐ
うゝ病人ふ對してを灸治ふ
効あり事ぜ一向考へ知らず
器うの理ぜ知まうを病
家ふうけがハざう ぜ二源ふ
やゝ又ようの報れの利なれ
ぜ男源ふゝふ役人の役ぜ勤
ひうまく薬剤の分ゝ計
灸ふの治ぜ醫ハま
ものうゝ食源ハまゝ人まぎ
のごとく治ハ醫をあぐう

病家ととうの知ゝ醫家
病家ととゝ薬剤のゝぜたの
ととゝ事ふ効ぜ浮大なの害
なれハ可なう不的中の薬剤
ゆて裡胃ぜ換じゝ元氣ぜうち
て死ふいうハむかゝーむべー
病家の加ゝて意まうを咎
醫の者ふ殺ざゝとれゝ醫た
源人うの病ふ効あるぜ初
ふうの報れふかゝりゝぜして
故ゝとんゝ古語ふ良相と

なしせんハ富貴良器とあるを
しつかとしたる術乃なしぶ
や己主んと欲して人代造
もしれ亜多ふそうびあば
病人代あらもしふ真切して
れのづかしうの術ふくりくか
里うの報礼と拓うじて来
源ぶし不ふじうひて奥代求
ひうれ親なるまあるも二巻
ふ名あうとの庸らもとをとい
まるしとしてう兵利のく

ふとしてうの術ふくりかうど
人乃生命代拓でれ報礼ハ
ますまして天乃冥代うく
ぶし人乃病代乃まこ病
ふうぶとくせよれいてしぶや
人乃生命代あづうれ職ふ
居て高家乃業ふ祈うれ
思の代ふし病者代乃まこ
真切なしぶうの術ふ明うあ
ぶ人乃生命代拓んまこ天深
わそまこざんやとうづかく

うの久ふあくごろ成ちゝバ
他乃業成あしくしてとあるあん
又富家ゐと業新を考ゆ業
と雜物乃値乃やうふん得ど
又一点の癖成ゐと商ひ成バ
う乃恩いくぐやたく醫の
分ハゐくとしうの恩乃ゑれ
成思ひてゐふてうひ事く
報じゐ〳〵ハ神乃ふ事ぶれ
人の恩ハ報ずゐ〳〵ぶうぶ人
乃為ハ成ずれ源ゐなう

ふうの恩成神んぶうれ
まう事ふ功あう醫ふうあ
事ゐ乃通ゐ同ひ商成
ぶ成天年成保門道成乃人
ぶ〳〵ゐふ生てけ事ゐも
ゐてゐ〳〵癖ふてうの
物ハ報くとしはゐ成ゐく
してうの恩成報ぶ乃〳〵か
やう乃事ふ成なうんあう癖
ゐ〳〵ぶ事ふ醫ふうあゐ禀
文乃強弱ふ成ゐうまれ

バ病ありとれ差れ治し人
を益乃事ふむ紙用ひ家式
と費やせとゝ為保事うた
あるもろ人あるもろ
▲業術ハ大うと有毒乃物ゆ
て病紙ヒしり乃奥なり實
しろ人とれはく攻撃を
治ととう乃病ふ的中せ
効ありて害なうゞしきう
まゞと早く其紙やめて用
れ中ゞし古人乃病ハ十分

ふ通ゞ治うとい人源と其
不ハ偏勢乃物なまゞなう
沼や虚人と的中ゞと
と攻撃乃紙火しく用
ゆうとれハやうて害あん病
七八分ふゞあゞしく保事う
て残病ハれ紙とさう紙まれ
ゞし醫ゞう人とうの術ふ
遠ゞゞう政撃ゞとゞく補
ゞゞ紙思ゞとうの時
紙矣ひ紙ハ虚實紙ゞう

小腸をしばして害ある
ものをはらし清しぐす
▲傷寒劇疾傷食のあれ
ハ急病なりこれハ類ふ
醫法撰びかゝるとすなり
一切虚扶の症ハ某ふりて
効ある人ゝ事迷なるもの
中ある考へ醫法かゝるべし食
治灸治法かゝるて塗ふ効と
なるべし
▲久病乃ハ飲食法節ふ

して房室法いましめ保養
もるべし胸ふ脾胃法病ある
時は林法ましるべし犯せ
バうゝひ発りて救たれ函京粹言
▲劇法やむ人ふ傷ゝまさ
傷人をもふれるる時ハいう
ふを弾ふかる法せてれる
べゝふ物車ふ法せ
て動く事ゝ劇ある
疾ハ下隧乃病ある
くゝ下隧法をゝて危ふいる

▲傷寒の浮葷肉強いむへ
し是れ救ふべ救ふべ
又水腫の浮油膩強いむ
又滑深の浮油膩強いむ 西京雜言
▲病者煩渇して甚飲水
強好めども全世醫ゝる人
を冷水強飲むまま強一切ふ
たそうれとふふ世ふ虚実の
人ハ松ほく実熱の症ハふ
れとも虚ようの虚実寒
熱強考へて与ふる時ハ功あ

ゝ是を加ゝざるゝ
水ハ質定なるとゝ味淡く
して性平なゝう偏毒の物
なしあゝ
▲温泉 温泉ハ明礬丹砂
硫黄の三物ゝ根とゝの蓋
して暖流とゝるゝゝ時ハ
温泉ふ浴して寒湿痺
れ脾胃虚寒のゝの強
活を尽し法虚火動の症
なるゝかゝ 丹鉛總錄

○温泉ハ病ある人ふあるべ
ばかりなく浴をすべし
そ温湯ふいりて虚憊
ばなるふてさかひ業及飲食
を訳て保養をなすべし○按ず
ふふ温泉ハ地中至陽の氣
より涌出るものあるて人ことふ
浴ずれ湯乳酸馳るれ功
ありもうまどもとうの温泉水
乃根とあるもの違あるべ
効と異なり本朝ともふふ

温泉おほくへ浴もる人とおほ
しもうまどもとうの理ふふ
く考へざふあるふ入浴の法と
密あるべ効あるべ食
效ふ得ば間害ふるとえ
りたもて本朝乃温泉を
明礬と硫黄との二物ふ根と
して涌出るとれおほし明礬
より出る湯ハ皮膚の瘙毒新と
金もふ効おほし硫黄より
出る湯の中風等乃病ふ効あ

源八もつて経略成温ゆ湯氣成
動くうゴ成ふ月出ゝ氣血頓
ぢうゴ成なしゆ又瘡毒浴ゆ
源人ゆ效あうと経略成温
ゆ余毒成温發ゆうゴ成なう
ゆ成ゆ帰効あうとあう又
年月成経くゆ志バく浴ゆ
ハ効なゆとあう腎病乃儀
深と稀力成強弱ゆ源く
又うの病ゆ應ぢうと應ぢう
ゆうの温泉乃性ゆ源

なう成ゆ成て計業験なう成成温
乃症を湯温成温成温てよく保養
ゆうゆ効あうのうとれおほし知う
成世乃人ゆ成審ゆ考へ源と
成ゆしゆ成ゆふゴゆ考へて
世乃人ゆとゆふゆ事成経ゴ
ゆとゆゆ成明察ゆ成
成なう成うゴゆ世ゆうの
ゆ成ある人なゆ成ゆあうし
識者ゆ成世ゆひろく成さ
バ万世乃幸あうん

○擬醫

▲人乃病あるハ其乃存亡ハ
醫乃工拙ふあづかるなれ
ども擬今乃世明識乃
醫もとくし偶明醫といへ原
とも其のもとくぶ偏見のあり
てなほこふ明なるこれ我れ
紀氏我ふ家今ぶ一人
ありて百病乃治効あるハ
聖賢乃續あくしてハ
ぶ[illegible]乃[illegible]ものなり志ろ

不病家乃人醫乃道一向
ふかくて其醫術撰ぶ乃
道ふかくを親族乃則て員
傍人乃浮説ふまり也効か
ひ薬術と久しく用ひ微功
ある術と大効かしこして
醫術かへ治ぜのやまりて治
ぜんと死ふいとう不意ふ者
乃罪のうまれたるまあり
▲醫術撰ぶたるまあり
て功術ぶまりぶ求むべ

業才ありてと治功術撰さ
源ハ治効ふ醫ふこ世あり
ざるとう乃薬術服せるとの
聖人乃方言と教世醫の功
術つまる術とう治ふかり志
まりとと救世乃醫或ハ老
醫ふりとと立物ハうの人乃
明と不明ふまりぶ一概ふ
論じるかぶ今乃醫者れ
日く八論ふものありて面術や
りまりて人乃人術まり伝

或かして人或襲殺し或ハ
異言異風或あしして世俗或
はどうとうのあり京ふ人
乃許淡ふのこと任せられし
又ときに氣象ふ食さら或ふく
こて捨ててうに

▲上ぐて古乃醫ハうの道
ふ奥切かして仏或用ゆふ
重し上古乃聖人ハうとさ
らかうそまとう代こう乃名
醫とよぶ深こう人ハ物理ふ明

かして発明れ深く治
効あり方論を立て今の世
ふかまて醫乃準則とあり
近世乃醫ハうの道ふ奥切
なしば病因症或明らふ
案し業此方ふ或実ふ
古人乃微言或さこう脉状
を切かして治或放も醫に
ものを作し況や治法ふと古ふ
ちらく今ふふちらかぐら
あり或ハ上古ふなくして

中古以来世ふ盛なる病あり
ものゝふこゝもとゝ乃病ハ古人乃
論説ものゝ如ざらんふ法式湯
とのおぼしき古人乃論方あ
をぶに真切ふ求めざるを
新奇ふ発明ふ書乃方
をとむなう近世乃醫
乃風ふ及ぶるふ器軒岐乃書
乃文字ふ拘ぶ実ふ拘ぶう
と思ひうの辞ふ偏して俗
耳ふ聚まるを御をうざう

乃備とゝうの病論を者ハ
八座ふ安居して志変乃
事ふ及ぶうざいく是ふ似て
拙なうのなりこゝ聖賢
立言乃微意ふ寄貫ふ熟ふ
ものゝ事情ふ変通でざるを
なり又古今乃方書汗牛
充棟ふいとゝ多のを
独乃ふ三乃方書ふ及ぶうと
四春入門ふちゝて病症
方ふとゝふ明ふ周ふ

として治療致あるとも危
しかるに見識あると専
東垣ふるい或ハ薛己張賓
が流ふまてこうひ或ハ刘河涧
丹溪が流致荷擔し或ハ是
致偏僻なりとするのハ
薛己張必賓が流ふ従
致ハまてこうひ河涧丹溪が流ふ
従ひてよろしく致ハ従ふべし
とゝハいへともこうの流ふ
温浪としてこうの有ふ従ふ

奔朋となく却てあやまり
れはし或ハ向上乃論のゝ致
はゝて治法乃くハ流致求ふ
或ハ方剤致集ふ致ねゝて、
理致求ふふうしく或ハ古人の
源を致と情ゝ致ふして妄ふ
古方致謗減しゝ或ハおしく
見識あるゝ温業法うひ人
参法うひ者ゝ偏僻乃名
致まねかまゝ致ゝまこうま僻
とゝりふ下しゝて治ゝ致

寒症乃病とん温毒とべ
しとそ治法あやまり毒ふ
病法をしらハ結きろゞ
ゞくなるとも病ふまうて
えふ害あるとものあるとの醫
ハ病源愚なる事ハなれとも
ゆゑなきしとまく病家より
告知せゞばとそ知まとなるへし
知とり察をいまを経ばこそ
古乃名醫乃ごとく人一さ汝
らこゝをバえうまづかるべし治

法ある事一古人乃偏僻ある
とい源治法をれのくるる
不あるかゆゑ指うとなれと見
へとり今乃見識なる人乃
偏僻ありとも用ゆるべし今
乃世ふを見識ある人乃治
法ハ偏なるやうふれとも
効ある事ハ用し醫法此業と
ゆる人ゆくん法用ひ源理法
さとるべき事なるゆゑ病家
と事ふ醫乃道ふん法とせ

酒あるは燗器に拵ひ肴菜の
類しるべし

○用業

山部しん商ふ茶方ふ
ふう業の用ひやう老人ふ
哭の業の用ひやう茶の
茶人じやう九散の調ひや
雑商ふ効ある茶方まど
て業に用ひて益あるし
扶あるとれ扶りまで成
くりくあるとん

用茶

▲茶は病の為ふるふるものゆゑて病なく服すべし常に気鬱
のふあるに茶は気鬱を散ず飲合せ節ありて移
書せば参茶のごとく
と百茶の中あり中和
乃ちといへども病なく服用
ゆまだ害あり腎偏勇の
物なきに病あり時ふ

と形氣とをふ実しと虚
人とし治法また害あり
虚人ふれとく斟酌すべし
世の俗ふ大病人ふ醫法かへ
業法用ふ一旦験氣あり
て与うと治せざるハ死症と
ま是法考ふ業法ふて
病法とも所一旦効法浮ん
ぶざくふ一とと
性氣元氣ふ乃ふ傷
ほいとくよくなりて遂

ふ死ふいてうと乃ん
的中乃業ふ
よりて偏氣乃業法ふ
元氣法動け病法遂去こ
とれなりかし況や不的中
乃業をや元氣法ふ乃
賊なるべし平生乃病ふと
的中せざる業法服すんすり
只食治法ふして收後の時
を待まれ志ひ漢書ふ病
ありて治せざまた中醫と

得ざるとい〳〵源を山こゝろあり
中醫を得ざるとき其症用
ゆゑにして保養をもろ紙いふ
なりまつるふ又早く其症
用ひて去ぬれば病紙去ぬべ
しと言ふいろ〳〵の世ふ多
し是を点もてとゝもろ
只しく撰ぶべのく
▲老人ふ兒婦人產好也
て脾胃虛弱也屬也ろ病ハ
脈しう濡紙助ろ紙

もろ〳〵ぬ專し食用を
節ゆ〳〵灸治紙ゆてし病
症ふもつとがひ方劑紙あとふ
ぬ〳〵方劑を溫補を標的
とぬ〳〵ふ容易の病
ふあぬべく保養を得ず
時ハ快復もぬし初ふれて
しう或ハ治紙あやゆう面部
手足ふ指紙紙あるゆもふ
いろてもろ一と法ぬう
らぬべこゝろ乃症ハ醫者も

虚症とは人まことに虚弱
ゆいてさまたさるほどゆとも思
ひて病家へ射しさほどゆとも切
となく大概の法剤ゆ病と
思ひ業ゆ代いろくれ味
ざるもと療治して食治
灸治の法とたりまたび
病家とさほでゆ病とも思
ひたうぐして月代行
ふちさめひ元気よりゆ病
ほしく一朝大ゆ虚熱発

熱さむまた病人ゆ悪
症をあらはさ逆ゆ敗ゆ
ほはしむべし
▲業剤ゆて補ゆといハ猶
乃偏ゆ足したる処代助
くられ術ゆして柔穀をん
外代事ひ灸代ゆて湯
氣代助くられ用ゆに
久しく用ひて悪まるし
とまだうれし理代加ぶ
人ハ攻撃乃剤乃害あん

て病を治すること
害あり事なし如し其薬剤を
ひさぐり却て病なとふかう
類世ふれは攻撃の剤も
古人故ありてとふけ三ま
しなりまくうの虚實と
病症に明らかにして用ひ
とれはうの効あるべし
ないの虚實病症に明ふ
ずに妄ふ用ひて害なし
れ或は用ひて効あるべふ

とれはそまて用ひべきなり
れの病に去る事に得べし
て逐ふ死ふいたう或は一生廢
人となる乃類とまた世ふれ
ば一或は病に出しふ矣し
或は補ふ矣に落世ふれ
ろいに不なう病家うの
理ふうれふむべからず醫う
人うの道ふ害れはいふぞや
▲虚一ものの病人まに食用後
節ふして脾胃に制ること道一

として薬効なきを用ひ寒
くと効なきまんだら的中の
薬ふとを穀氣乃まさうに
たはく用ひてかんりて
害あり穀ハ平和の物
薬物ハ偏氣乃如なれバく
▲たとへ虚損乃症紙補ふ
ハ薬紙おくの欲て緩く効
紙とうらしい風濕乃症紙
攻るハ多く欲て速ふ
効紙とうらしい○安ふぶとうふ

今朝乃安剤もそなて
量用おしー或人乃曰本朝
乃人ハ中華の人より生稟
よハたれとうと志うふ今
瘡毒紙病ろ人もし去薬を
乃大剤紙用ひふ剤ふて効
なたふ大剤を用ひて効紙
得るものたれはし志うまば
ろの他病邪紙去るふ大剤
ふ効ろものろん病症と
薬剤と紙考へ紙盡も

ゞ〻

▲れいそ病上焦ふあるものハ生ふ食して病ふ業紙服をゞ〻病下焦ふあるものハ生ふ業紙服して病ふ食をゞ〻上焦ふ業紙めゞ〻さんと思ハゞ細ふ頻ふ飲ゞ〻下焦ふ思ゞ大ふ数ふ飲ゞ〻膏業紙服をゞ〻ふハゞ口中ふあゞしあ細〻ふ

飲下をゞ〻湯紙ふて服をゞ〻ふ散紙用ふハ業ハかゞゞかゞして飲て好ふ湯紙用ふべゞをゞれゞゞ今乃丸業ハ古人の法ゞ遠ゞ湯紙ふて飲下をゞをゞゞかゞゞゞ方劑ふより意紙ふ雄砂をゞ

▲俄乃病ふ丸散を用ふ

又温湯にてひたしてとぎ
洗液にてあらはしてとぎ
かりそめに脾家ふ散にて
して糟粕となるのを
▲れんそう毒にて解毒の薬
ハ冷脂ものゝ熱薬
ハ冷してのち丸散ハ冷水
ふて送りもちゆべし
▲世ふ妙薬として一三の中薬
にて立処ふ効ありて得るに
神のごとくいひしやにあり

付系或ハ志ばゝゝれ物にて
ハ禀受堅剛の人ふて服薬
も害なく効あるとあるべ
しとうらもて毒ふ用ひ
かゝるべきの薬にたゞ
ゞ痢疾虚瘡などふハ
必用ひかゝるべき理なり
くなるに病症と薬方と
ふりて的中するとあり
ゞ多くハ事にて盡さゞるゝ
かゝるべしといへとも病人の虚

實薬方乃温冷をとゝ考
もしたゝ是くゝ擇乃
○薬ぢろふ一二味乃単方の
をふあゝば古書ふ見ゝば
て民間ふ作り薬方紙ゝて間く
治効を得て雑病をとゝ治
もろくのあり今朝上古の
醫師乃立らまてろ薬方を
れしくゝて書ふ作りゝば民
間ふ敬至てろとあゝしうや
一向ふあゝどく拾ゝゝば病

家ふろの薬品乃雑毒病有
乃虚実をとゝ考ゝば毒ろふ
用ゆろハむあやゝ注ひ色
しゝうまてどくとゝ酸ろうゝ古
書ふ作ゝゝごろ紙雑方と
世ふまゝとふ疾ろ古書ふと
くりゝく論ぜごろ紙雑病と
て作んぢろハ混まろ混古ふ
まゝふて今盛ふ疾ろ病を
やたゝゝ万金乃貴薬ろうと
ろうの疾ふ効なくハ何の

益ども一二乃世業さうとも
効あるものハうの病ふ射
て良業をうを雜病ちと
ち人乃苦しむハ用ゐ人乃位
治法定むるごとく一向ふ拵ん
じいやしむ角ゐ迚病家
ふ業世代考へ定て用ゆる
法ちまとと古人乃兵せ
ざる病症業世ちふ今
乃醫乃考へ加ぐる事れ
病家乃人ふ大ふ異ことの

五十井あして百井法ふ乃
類なる角しまるのくるゐ
用ひて治効あるをと世ふと
し偶中ちして乃理法求あ
ど世なるあれ治せるの
理あまバこそ乃効あり何
理ふ偶中しのくせん治れ
うの道ふ真切ゐぐして考
ちぐる点なるぐ志あん
人ハ熟思ひてちげまざんや
玉札丹砂、赤竹節青芝之牛溲

馬鼓敷鼓乃皮まで收め蓄
へ用紙待て遺ものなれハ
醫師乃良なりといつる古書
ふのもざん一二乃単方といそと
とうの理紙脱うて用ひべ
効あん海家とまこ一味乃中
ぞふなりとと醫乃助紙御ん
ぞろ事おうまこ海治しるべ
万行乃実業ふ揚まうと
古書ふあうとと御うるれ
ゆたあうじ盡く書紙信でん

書方にたたぶとうや諸醫
乃明察みして妙用紙得ふ
あうもうふ古人乃方御と
もう智乃及ざうハ捨てうの理
紙水ひとして古人乃微意
紙さとうびあうひハ古人乃謬
あうとと用ひて案ものべ或ハ
単方和方乃ごとれハ一向ふ
御んじて案ものべ書ふ能持
應変もうハ醫乃妙用なう
とにふ御もうとうの能持

應変せざる紙法あれば
して何を紙に抜應変すべ
や上聖人の書紙積て本源
を究めるもの下一二の草方
ふいろもでも紙盡さ紙色
かるべ

▲業紙煎じ方の煎
を用ひるに銅鉄の器ハ
よろしかるべ五味子苟葉の
類煎乃醸業乃入るハ銅鉄
乃氣紙吸出して人ふあら

▲業紙煎じ方ハ若を方
より汲るハ水性乃損ぜ
ざる紙用ひべしたとへ井
乃水流水泉石水東間水
等病症ふよりて用ひる古法
あり是をしるべしかるべし
かり小便宜紙憑ある人あり
応醤油ふよる事あるを
長川志流水紙ふておの
業紙煎じ用ひしかば一飲
ゆていひしい方水を擇

ざうゞ色うしたる

▲業紙炭ぶるふ生熟乃二法あり初ふ水紙おく入てれほく汁紙ゝる紙生と以熟といふハ水紙れほく入ておく汁紙ゝる紙いふおくそ

補業ゝた熟紙用ひ初業ゝた生紙ゝうゞ

▲業紙用ひるふ文火武火の二ちあり文火ゝたゝる紙火なり武火ハ剋し紙火の

補剋ゝた文火紙用ひ深補ゝた武火紙用ひるゝ

奔散將下乃業ゝた紙

炭紙用ひ淺補乃業ゝた

清炭紙用ひるゝ○熟業紙温振ゝるハ湯氣紙備ゝた

意なりゝる紙用ひへうゞ

▲業滓紙ふゝび熟ぶるハ

古法ふハなゝ味ふ厚薄

あり氣ふ將宣あゝゞ若

うゝびぶゝ熟ぶるゝ紙ハ味厚

して氣をたすけ
あるいは氣をとり味薄して氣
脉をたすけ
し君臣佐使乃寫法
かの如くに義藥劑ふ
貴藥あるて多者乃ふ
やむこと能浮ざるこれハ二三
服乃濃煎合して一服の藥
法煎ふて藥ハ用ゆるも可
▲振出し藥ハふ兒乃藥飲
ざるふ時ハ煎出し一ハぶ

用ゆる時器よりわたすこと
たして藥ふ形氣奪薄極
宜あり振出して出ざるもの
れはしばらくのぞう飲て
ハ方劑乃法なるのこふあ
ば熟とあるべし熟ど
て用ゆること小兒ハお
ほく飲ざるもいよく深く
煎じ藥方乃あるやうふも
ば
▲丸藥乃法　下焦乃丸藥

八大ふこせぐ一中焦乃丸茶
はこまてふ沢ぐ上焦ハふ
ぐ　李士斉三書

▲丸散を篩ふ法　絹篩
ふてうひて粉一ふ合せ
ゆ紙篩して和用ちむ
ぐ四五返とかくのごく
ぐ

▲稲紙穀ふて貯ふ法
しく出くぐ十余年を
保つぐ茶紙丸ぐふ漬

金茶紙用ゆふ法
以くぐ
▲糊騰紙炼茶丸茶ふ入ふ
ふ水ふ浸し亜作ふ
ふ紙澤紙さふ余茶ふ合
ぐ

▲樟脳紙入まて貯てふ茶
ぐ用ゆふ紙紙漬て焙
樟脳乃乾紙ふぐし伏
紙いむ茶ハ湿地ふ亜ぐ
樟脳乃乾さふ奥乾ふ

紅紙度とる

▲立春より晴明ふいらま
で丸水浦丹丸なるひふ茶
紙酒ふ浸して制ぬるまこば
久しく堪まだ

▲或人乃四氣虚乃症ふ補
中益氣湯紙用ゆるふ脾
胃ふなつこて不食ものを
あるふ散ぶふとして功と得
原本に保し

▲夜してかれかのそづまこと

ふ天南星紙末して姜汁
ふ調へ丸乃麺ふまる一
夜ふして与り收保又ま
乃耳ふ吹入保をす

▲膏紙ぐ紙あれぐ臙
瘡ふ生葱紙より焙し
湯ふて炙熟し熱紙
臙ふふ付て絡ふてほ
ぐり冷水紙飲
ばうん

▲ふ兒乃魚乃下おくだ

まてろに泥鰌を黒焼にし
てほくろ
▲齗より細く血出るは塩
をよくぬり寝しての後
歯ハ痛く腫る事あり又
歯乃よはれんむばけるをも
を出し汁を和塩を和りて
焼てめりをし又齗腫ふ
腫て痛むれかりやまを妙薬
じらくむべし
▲歯乃浮ゐるに　丁子　松笠

桑白皮　各等分水一盃半
入れ酒少入煎じてうくむべし
▲瘡毒乃一方
皂莢乃枝細に刻こ七十匁　川芎二十匁
土茯苓二十匁　甘草三匁
大麦七十粒　右七味にまぜ
七日に用ゆ　煎方ハ一番に
食椀に水三盃入て二盃に
煎じ二番に二盃入て一盃
に煎じを功を浮りよのれは
此方なり瘡毒にて耳の

龍骨ゝろふとを月紙紙
ぞろん効迷ろり延寿一
剤ゝて一二剤用ひろの
月数ほと茶紙やあ保喜
紙ぬゝゝと又脂ぬぐ
毒気乃去ゝと去ぞろと紙
考へ五六剤紙用ゆろ
▲歯乃根内ゝ法ろふ紫根
一味炭ゝて六くし澤紙黒
焼ふゝて分ろゝ落馬
て歯紙あかゝろふゝ

▲痛紙やひろ一方　大黄
天南星　黄柏　鹿角霜各
五倍　胡粉　川芎各二銭
右虫積或八食傷ふて腹
痛ゝ止ゝて塊あゝて胸
腰ゝ痛ゝ計灸黒乃
効あゝぞろふ法ろて痛紙や
ひろふ粉ろろ付やゝ八右一味
ふ粉ふ酢ふて粘紙ゆろく
とゝ化右乃茶ま紙合せ痛
ひ布ふ付ふ紙紙ろ全

[illegible]ん酢ごうふて
[illegible]魂ふて痛計業効
あ〜ざうふ三ぶく効をゆう
▲世ふ桂枝と肉桂と成二物と
う乃功能成別つハ強なり仲
景乃意ふ違て桂枝ハ桂の
如名ふして桂乃枝と心事
なり葛乃根成葛根菊乃花
成菊花とし[illegible]ふ用ゐ只一物
と補薬として味辛く事
く氣補助し[illegible]成採用ゆ

[illegible]

をしへ草　教訓西入　法橋玉山画　二冊

此書ハ男女ともに家業の道故をしへとなるべき倹約をやめ孝行忠義をすゝめ其外日用の心得となるべきものも故こゝに図をいれ〜ハ〜狂歌故まじへ〜かりそめ書なり

婦人養草　西入　四冊

中頃の大儒藤井懶斎先生ゑびすの息女の撰し〜ゑびすら〜書〜く婦人女子の心得なるべきよう数百條故あげ其餘日用乃重宝なるものも故くハ〜くちせり

元文二巳年三月刻
文化三寅歳二月補

「書林定學堂藏板
大坂新町西口
小濱町角用　海部屋勘兵衛